

目的 成長期における児童生徒の衣服の実態調査を行ない、健康増進に役立つ資料を得るため、今回は先報に引き続き、児童の通学服についての着衣調査を実施し、主として衛生学的立場から検討を加え、若干の成績を得たので報告する。

方法 本調査は1979年～1980年にわたり、阪神間に居住する小学生5、6年、215名（男子100名、女子115名）について四季にわたり実施した。調査内容の概要は、先報の中学生生徒の実態調査に準じて行ない、1) 性、年齢、体格、天候と寒暑感覚、冷暖房との関連。2) 上半身および下半身衣服の被服構成、衣服の種類、衣服丈、材質、衣服重量。3) くつ下、ベルトなどの類被服類。4) 衣服総重量。とした。

結果 今回は主として制服着用時での実態であるが、衣服総重量の性差は、男女の制服の相異による影響も大であるが、男子着衣重量は女子に比較してやや軽い傾向がみられ、冬、春季は140～165g。夏、秋季は60～70gの衣服重量差が認められた。男女共、冬季は夏季の約2.5倍の衣服重量であり、向寒期は向暖期に比し衣服総重量はやや小である。また上半身着用衣服の種類や枚数の多様化がみられた。体表面積当り衣服重量、および上半身、下半身着用衣服、制服着用時の体温調節などについてこれらを検討し報告する。